

現在までの発掘調査の概要

万瀬遺跡は境川右岸の東向き緩斜面に立地する遺跡です。国土交通省が進めている設楽ダム関連事業に伴い平成 16～18 年度に行われた愛知県教育委員会による詳細遺跡分布調査では、万瀬遺跡で縄文時代から戦国時代までの遺物が採取されています。これを受け平成 20 年度からは、愛知県埋蔵文化財センターによる範囲確認調査が行われ、遺跡の範囲が広く分布していることが明らかになりました。そして今年度は、県道 432 号小松田口線よりも東側の区域（14 区）2050㎡の発掘調査（本調査）を行うことになり、6月から作業を進めてまいりました。

現在、万瀬遺跡（14 区）では、調査区北西部に広がる縄文土器などを含む黒色土の堆積（これを遺物包含層と呼びます）の調査を中心に進めています。黒色土を掘り下げていきますと、石が集まっている部分（集石遺構）が5ヶ所以上見つかりました。この集石遺構は、よく観察すると、長方形または楕円形のまとまりがいくつか並んだ状態となっていることが読み取れます。そして、そのまとまりの外側の要所に大きな石を配置しそれを中心に石が並んでいるように見えるところもあります。このような遺構は配石遺構と呼ばれ、縄文時代のお墓あるいは祈りの場ではないかと推定されています。配石遺構の中からは縄文土器の破片（注口土器や深鉢）や石器（磨石や敲石など）が出土しており、時期は縄文時代後期中葉（3500～4000 年前）と考えられます。

この他に、縄文時代晩期（約 3000 年前）の縄文土器や打製石斧、鎌倉時代（約 800 年前）の陶器（山茶碗）、江戸時代初期（約 400 年前）の炉跡や陶磁器なども発見されています。江戸時代の炉跡の付近からは金属加工の際に排出される鉄滓が出土しており、ここで鍛冶作業が行われた可能性が考えられます。また、調査区北西部以外の区域でも江戸時代などの遺構が広がっていますので、これからの調査が期待されます。

今後は、配石遺構などをさらに掘り進めてその構造などを明らかにし、調査区全体の調査を進めていく予定です。



発掘調査の様子



発掘調査の様子



出土した打製石斧

万瀬遺跡地元説明会資料

平成26年8月9日(土)

(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

ナカシャクリエイティブ株式会社



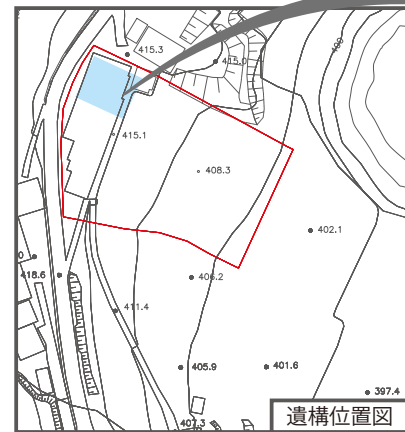
発掘調査の様子
黄色の表記は配石遺構の番号です

はいせき い こう 配石遺構 (01SX)

「配石遺構」とは、数個～十数個の石を何らかの規則性を持って配置した遺構です。石が環状に配置されていれば、「環状列石」とも呼ばれ、配石の下や周辺に遺体を埋葬したと思われる墓墳が見つかる例もあります。万瀬遺跡の配石遺構は、ある程度のまとまり、並ぶ方向などは決まりがありそうですが、やや雑然とした印象を受けます。今後、掘り下げていくにつれてその全容が明らかとなるでしょう。出土遺物より、縄文時代後期（約3500～4000年前頃）に作られたものだと考えています。



たたき
いし
石



拡大



だせいせき
打製石斧

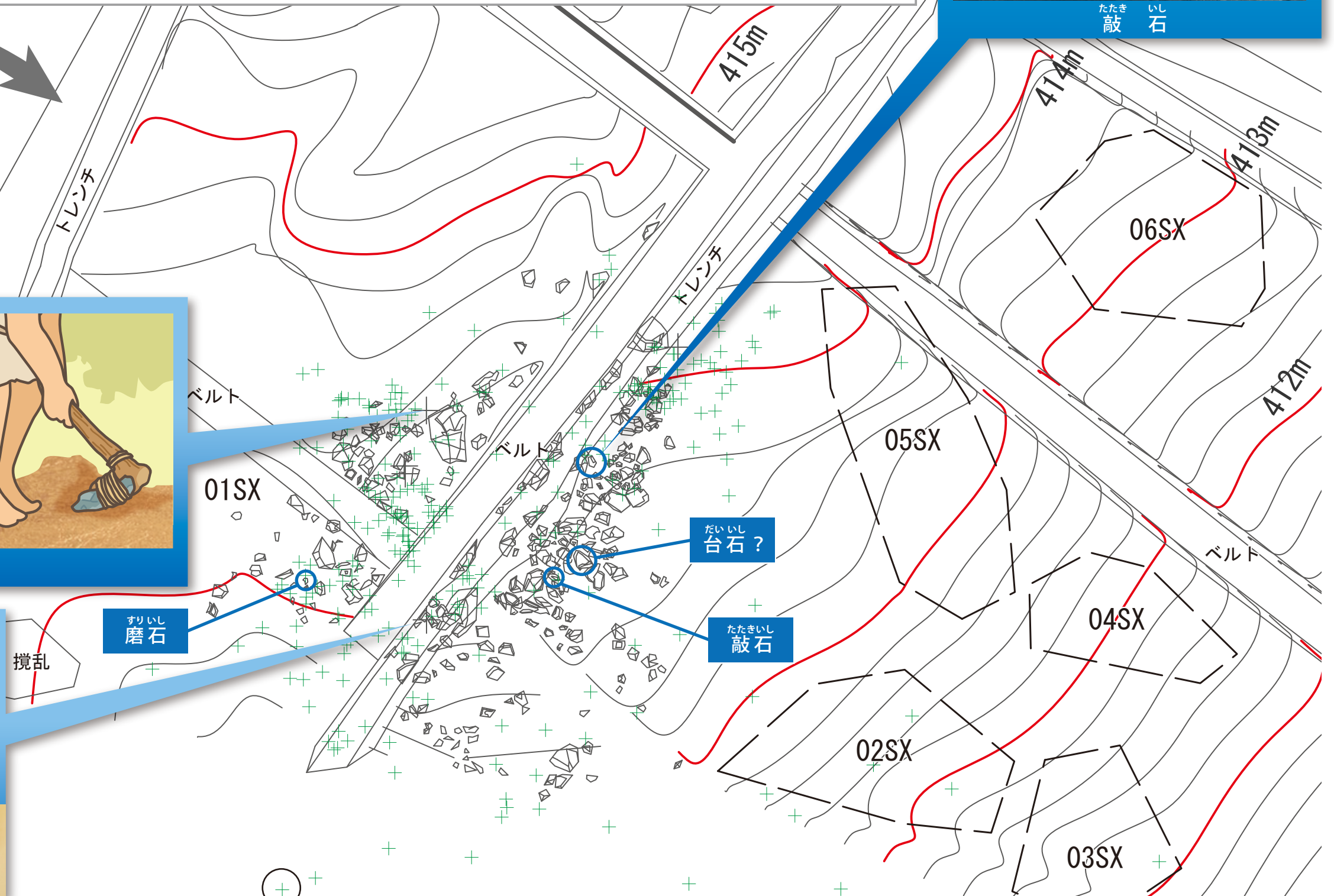


すりいし
磨石



ちゅうこうど
注口土器

外面



このマークは遺物が出土した場所を示しています。

